

二人いるとき

宮本百合子

青空文庫

習慣になつてゐるといふだけの丁寧なものごしで、取次いだ若い女は、

「おそれいりますが少々おまち下さいませ」と引下つて行つた。

土庇が出ている茶がかった客間なので、庭の梧桐あおぎりの太い根元

にその根をからめて咲き出ている山茶花さざんかの花や葉のあたりを暖か

く照らしている陽は、座敷の奥まで入つて来ない。多喜子は、座布団の上で洋装の膝をやや崩して坐りながら、細い結婚指輪だけはまっている手をもう一方の手でこすつた。床柱も、その一輪差しに活けられている黄菊の花弁の冷たささえも頬に感じられて来るような室の底冷える空気である。

暫くぼつんとしていると、廊下のあっちの方で、

「お客様にお火をさしあげて？」

と云っている尚子のきき馴れた高い声がした。

「あら。どうして？　すぐ持つて来て下さいよ、お茶もね」

区切りのドアが開くと一緒に尚子の言葉がすぐそこに響いた。

「失礼いたしました」

そこへ出ていた坐布団の上へ両膝をいちどきにおとすように尚子は女学生っぽい挨拶のしようをした。

「御免なさいね、お火もないところでお待ちせして」

多喜子は、大きめの手提鞆をあけて仮縫いにかかっている服をとり出した。

「すぐなさいます?」

「もう少しあつたまつてからにしようじゃないの。——でも、……おいそぎになるの?」

「いいえ、そうでもないんですけれど……」

「じゃあ、ゆつくりなさいよ。きょうはうちでも珍しくすこし風邪気味でお休みだし——……」

一二度麻雀に誘われて遊んだりしたことのある良人の幸治のこゝとを云い、尚子は、

「でも、私、ほんとにあなたはお偉いと思うわ」

丸い柔かいウエーヴのよく似合う顔立ちにいつわりのない色を浮かべて云った。

「よくお仕事はお仕事と、いつもきっちり事務的にやっていますしやと思うわ。私たちなんかお友達がよつたらもうおしまいよ、つい喋っちまって」

「あら。私たちだって、随分だらしないときもありますわ」

「そうかしら。拝見したことないわ」

困ったような、はにかんだような笑いかたをして多喜子はちよつと居住まいをなおした。関係から云つても、同級であつた桃子の兄嫁のところへ、ただ洋裁の仕事先として多喜子は来ているのであつた。

仮縫いの方を着て尚子が立っている背中の皺にピンをしているところへ、襖の外から、

「いい？」

声をかけて、桃子が入って来た。

「ちは」

学生時代のまんまの符牒のような挨拶を、ピンを唇で押えていたので口の利けない多喜子に向ってかけ、桃子はすこしはなれたところからぐるりと尚子の立ち姿を見まわした。

「いいじゃないの、なかなか」

「よかったわね、やつぱりこのカラーの型にして」

「そりやそうさ、お嫂^{ねえ}さんたらVにするなんて。そんなのないわ」

裾の長さまできめてから、多喜子は自分も立ち上って、出来栄を眺めた。

「思ったよりよかったこと——お袖のところいいかしら？ つれ
ません？」

「——いいようよ」

桃子が、

「原さん、すっかり板についちゃったなあ」

感歎するように云った。

「本ものになっちゃった。これでお顧客とくいさえふえりや堂々たるも
んだわ」

「ベビー服で降参するだろうって云った人だあれ。せいぜい紹介
してよ」

ピンを肌に刺さないように、そしてまた折角さしたピンを落し

てしまわないようにと、むき出しの両腕を揃えて頭の上へ高くあげ、それなり半身を前へかがめている尚子の頭の方から、仮縫いの服を脱がしかけていると、廊下を、ゆつくりした足どりのスリッパの音が近づいて来た。尚子が耳敏く、

「お兄様じゃない？」

桃子に、

「ちよつとまって頂いてよ」そう云っているうちに、

「いいですか？」

すこし改ったような咳払いをして幸治が外から声をかけた。

「だめよ、今入っちゃ。まだ猫に紙袋よ」

笑いながら桃子が大きい声を出した。

「ほう」

また咳払いをする声がある。

「はい、どうぞ」

「やがて尚子が自分から幸治のために襖をあけてやった。

「や、しばらくでしたね」

裕の対を着て、きつちり髪をわけている幸治は、武骨っぽいずんぐりした体つきに似合わない軟かい笑いをたたえて、テーブルのところへゆっくりとした動作で坐った。

「随分しばらくお目にかかりませんでしたね」

「つかかけちがって……」

多喜子はほかに云いようもないのであつた。

「おかげなんですよって？」

すると桃子が、

「やー、お兄様」

とはやし立てた。睨むような眼差しをするうちにも尚子は笑いを抑えられない風である。飲みすぎか、怠けぐらいのところらしい幸治がにやにやしなから、

「貧乏ひまなしでやっていますとたまには、病気もなかなかいいところがあるですよ」

エアシツプの灰をおとしながらしかつめらしく云った。

「妙なもので公然と欠勤した日の味はまたちがいましたね、勤人根性ですね」

増田の父親の経営している会社の子会社へ、若専務として幸治はオースティンで通っているのであった。

苦勞のない三人がストウブのまわりで顔をつき合わせて何や彼やと、やや倦^うんじたところへ多喜子が来たのも、小さい新しい一つの刺戟であるというらしい暢^のびやかな、とらえどころのない雰囲気である。

多喜子が帰るしおを計っていると、幸治が案外の敏感さで、「まあよろしいでしょう」

ととめた。そして、冗談と十分相手に分らせた物々しきで、

「どうだい、ひとつ多喜子さんに僕たちが何に見えるか鑑定していただこうじゃないか」

と云い出した。

「何に見えるつて——何なの？」

桃子の顔を見ると、桃子は火鉢のふちへもたれかかつて妙に口元を曲げたなり火箸で灰をいじっていて聞えないようにしている。「実はきのうは、僕たちの記念日でしてね、ひとつ趣向をかえて御飯でもたべようということにしましたんです、或る家でね。細君なのか、細君でないのか、という微妙なところをやつて見せようというのに、役者が下手で駄目なんです。僕がわざと女中の来たときに、あっちのお帰りの時間はいいんですかとか何とか盛んにやるのに、この奴つたら、……」

尚子は、ふふふと笑つて、

「だって——」

と云つたが、いかにも屈托ない様子で、

「あの女中さん、一向けろりとしていたわね」

それが寧ろ不思議らしい調子である。

さつきから黙っていた桃子が頬つぺたに散りかかる髪を払いのけるように火鉢から頭をあげて、

「とにかくお兄様は心臓がつよいわよ」

何処か突かかるような云いかたをした。

「ところで、多喜子さんにはどう見えますか、夫婦にしか見えませんか」

「だって——ほかにどう見えたらいいんでしょう」

「第三の人物を仮定して見ても駄目ですか？」

ほかならない結婚を記念する晩に、わざわざ自分の妻に不貞な妻としての役割をさせ、自分をも不貞な良人と仮定した位置において食事を一緒にする好みとは、何ということなのであろう。女中がけろりとしていたとか何とか、罪のない眼附を良人の顔の上へ注ぎながら云っていた尚子の丸い顔を思い出すと、多喜子はそこにああいう日暮しの人々の結婚生活というもののかげに潜んでいる非常に恐ろしい、唾棄するようなものが、尚子にも氣附かれずのぞき出しているのを感じた。帰りかける多喜子を送って玄關へ出て来た幸治夫婦が、計らずものの拍子でくつつき合った互の

肩をそのまま並べ、上機嫌で、

「さようなら」

「じやまた、御ゆっくりね」

と晴々した声を揃え、多喜子に向つて手をふつて別れを告げた彼等のもつれあつた姿を目に泛べて、一方に何か全く普通の娯樂でもあるかのように話されたそのことを考え合わせると、多喜子にはそういう人々の生きている感情の奇怪さが迫つた。この頃はいつ召集があるかもしれないような事情のなかで、自分たちが本気でそれを守り高めようとして暮している夫婦生活の平凡な真面目さが、何かに嘲弄されているような嫌な氣もするのであつた。

北向きの三畳が多喜子の家では仕事部屋になつていて、東の高

窓際にミシンがおかれ、仕事テーブル、アイロン台と、順に低い一間の明り窓に沿って並んでいる。赤い三徳火鉢に炭団たどんを埋めたのを足煖炉代りにして、多喜子をもって帰った尚子の仮縫いの服の仕事をしていたのであったが、暫くするとそれをやめてテーブルへ置いた。重くてつるつるとしたその絹服の感触が幸治たちの生活の感覚をひっぱっているようで、いじっている気がしなくなつたのであった。

多喜子は腕時計を見て、椅子をおり、台所からもう一つ同じような三徳をもつて来た。茶の間の火鉢からおこっている炭団をうつしている、格子の鈴が鳴って、

「いらつしやる？ あがつてよくつて？」

カタ、カタと足からぬがれて三和土^{たたき}に落ちる左右の靴の踵の音をさせて、好子が入つて来た。

「——小枝子さんもまだだったの？ 私おそくなつたと思つていそいで来たんだけど……」

毎土曜の午後、多喜子は洋裁の稽古をしているのであった。

「狸^{まみあな}穴からだから、途中にかかるのよ」

「きよう、お宅は？ やつぱりおそいの？」

「夕飯まで図書館へまわつて来るんですって。この頃あのひと一生懸命だわ、呼ばれないうちにせめて今やっている分だけでもまとめたいて」

参吉は或る私立大学の講師をしている傍ら、近代英文学の社会

観とフランス文学のそれとの比較をテーマに研究しているのであった。

「うちの伍長さんだつて危いもんだわ」外套のボタンをはずしながら好子が云った。

「落着かないわねえ。何万人もが私たちみたいな心持でいるんだと思うと、夜中に目が醒めた時なんかとても変な気がするときがあるわ」

秋ごろ戦死した或る新劇の俳優の噂が出た。

「でも私秋子さんをまだ幸福な方だと思うわ、亡くなった旦那様の仕事を守ってやって行くちゃんとした俳優としての才能が御自分にもあるんですもの」

「そう簡単なものかしら……」

参吉と話したときもそうであつたが、多喜子には、別な内容で秋子という女優のひとが経て行かなければならないであろう苦難の複雑さが深く思いやられるような気がした。

「一緒の仕事をしていて、しかもあの方たちみたいにな、どっちかつて云うと旦那様が指導的だつた名コンビは、私は片方に死なれるのはこわいと思うわ。打撃がひとより深刻ですもの。才能っていうか、生きる意力っていうか、そういうものがよっぽどなければ、その深刻な打撃を芸術と生きる態度の上のプラスにするのがむずかしいもの。大変な努力だろうとしみじみ思うわ」

好子の良人は或る機械工場に勤めている技師であつたが、この

夫婦の生活の色合いは、例えば今も好子が、

「そりや、居なくったってどうにか食べては行けるにしたって、
ねえ」

と自分の心持を云いあらわすようなところで、多喜子たちと違っているのであった。多喜子は三畳の方へ来て、テーブルの上へ型紙をひろげながら、

「ねえ、あなたのところはどうか？ 私たちこの頃、また随分いろいろ話し合うようになったわ。昔左翼のひとでね、夫婦の間で決して翌日まで喧嘩をもちこさない約束で暮している人がいたって、その気持やつと今わかるようだわ」

好子にしろ、洋裁をやり始めたには、やはり勝たずば生きてか

えらじという歌を流行歌のようにはきいていられないものがあつてのことなのである。

心の内から堰^{せき}あふれて来るものに動かされている眼の表情で、多喜子は、

「好子さん、あなた、詩人に注文がない？」
と云った。

「私あるわ。もつと本当に私たちが大事なものを出してやる心持をうたった歌が欲しいわ。勇ましく戦つてくれ、そして、成ろうことなら生きて還つてくれ。どんなにこの心は強いでしょう。そして皆の願いがそうなのだと思うわ。そういう真個^{ほんと}に情のあふれた落着いて勇ましい励ましの歌が欲しいわねえ」

好子は、型紙のつくりかたをやっているところで、ハترون紙の隅で計算をしては物指で作図をしている。テーブルの上へ拡げた紙へ胸ごとのしかかる姿勢で好子はおだやかに云った

「山田は時々戦死するかもしれないよと云うのよ。そんなとき、私、それはそうねと云って、それでもやつぱり何か確^{しつ}かしたものを二人の間に感じて落着いていられるようになりたいと思うわ」
やがて小枝子が、寒いなかをいそいで歩いた薄赤い澆漉とした顔でやって来た。

「御免なさい、おくれて。出征の人で電車がこんでこんで……」
事務員らしいてきぱきさで、小枝子はすぐ仕事机の隅の風呂敷包みをひろげ、三尺の押入れを衣裳箆笥まがいにしたところに吊

ってある縫いかけのスーツの上着を出した。小枝子が来るようになってもう一年以上経った。事務員では何年つとめていても技術がつかない。その自動車会社がしっかりしているので目前の月給は悪くないのであつたが、小枝子は或る時不図そのことに気がつくところへ洋裁を習いに来はじめたのであつた。今では、ひとの物も縫えるところまで腕がついてるのである。

独身で勤め人の小枝子に加わると、話題もおのずからひろがつて、三人の女は手や足先を動かしながら、その後援会に二人が加わっている女優の演じた田舎の庄屋のおかみさんが粹すぎたなどという話も出た。仕上げミシンの急所のところで、多喜子が、

「あ、ちよつと、そこはこうした方がいいんじゃないかしら」

自分でミシンを踏みかけたら、小枝子が、

「私、下ふみますから……」

多喜子を軽く押しのけるようにした。

「あら。大丈夫なのよ、今は。自分の仕事だつてしている位なんですもの」

「ええ、でも。今度は本当にうまくお生みんなならなけりやいけないんですもの」

何か思いがけなかったような女同士の温い心づかいが小枝子の声や身ぶりの中に感じられて、多喜子は却つて言葉がつまった。

去年初めて妊娠したとき、多喜子は自分の健康に自信をもちすぎ

ていて、テニスをしたり自転車にのったりしたために流産をした。小枝子はそのことをさしているのであった。

一仕事すんだくつろぎで番茶をのんでいると小枝子が、

「きょうの『女の言葉』よみました？」

と二人に向つてきいた。

「朝日のでしょうか？ まだ見なかったわ、何か出ているの？」

「ある女のひとが投書しているんですけどね、電車のなかで私たちがみたいな女がドストイェフスキーみたいな厚いむずかしいものなんかをよんでいるのを見かけるが、果して彼女達はどこまで理解してよんでいるのだろう、って云うんです。電車の中なんかでは軽い雑誌とかパンフレットでもよむべきだって、その女のひ

とは云うんです」

「何てわからないんだろう！ そのひと」多喜子が、怒ったように小枝子に振向いて訊いた。

「生意気だつて云うの？」

「さあ。——とにかく机に向わなけりやドストイエフスキーなんぞわからないつて云うんでしょう」

「変なのね、私たち誰だつて電車の中でよんだ学課以外の本のおかげで、どうやら読書力がついたんだわ」

「そのひとには、往復の電車で本をよめるというのがどんなに勤めているものよろこびと慰安だか分つてないんですね、きつと」

いづらか難詰の声で小枝子が云った。そして、

「何しろ、現にこういうのがあるんですからね」

自分のメリンス包の下にカヴァをかけてもっている大版の「緋文字」をちらりと見せて小枝子はユーモラスに首をすくめて笑った。

「何だか苦しかった。どっかに今朝の『女の言葉』を見た人がいて、ははん、あれだな、なんて見られているんじゃないかと思つて」

「まさか！」笑い声の中から、小枝子が、

「現実に、ひる間つとめて家へかえれば疲れているんですからね」と云った。

「机にきちんと向わなければ読めないんだったら、私たちのようにして暮しているものは結局一冊の本だつてよめやしないと云うことになるんです」

顔の内側に明るく燃え立っているものがあるような表情で小枝子はそれを云うのであつた。

多喜子たちが卒業した女学校の専門部で文明史を教えていた教師の一人が、イタリーの方へ交換教授のようにして行くことになり、その送別会があつた。出席した同級の幾人かは、どちらかという就多喜子のように友達に会いたい方が主で、こつそりこちらのテーブルの端で、

「私戸田先生イタリー語がお出来んなるなんてちつとも知らなか

ったわ」

「日本語を教えにいらっしやるんだって。だからイタリー語は出来なくなつていいんでしょう」

そんなことを、凡庸であつた教授ぶりへの感想をもこめて囁きあつてゐる連中がある。形式ばつた茶話会がくずれてから、多喜子はヴェランダのところで煙草をすつてゐる桃子のそばへよつて行つた。

「お嬢さん、小包で送つたりして、何とか云つてらっしやらなかつた？」

「平気よ。——きのうだか早速着て出かけたわ」
多喜子は、ちよつと躊躇していたが、やがて、

「実は私、こないだのあの方たちの話、余り妙な気がして……」
と云った。

「私の仕立屋さんとしての面でだけ受け切れないようなところがあつて」

と苦笑した。桃子は、とつさに何のことか見当がつきかねる風であつたが、

「ああ」と、軽くうなずいて、

「あのひと達あなのよ」あつさり煙草の灰をはたいた。

「そう云つてしまえばそれつきりみたいなものだけれどさ。――

私桃子さんの生活が、やっぱりああいふ空気の中にあるんだと思うと、それでいいのかしらって気になるわよ」

「大丈夫よ、原さんたら！——相変らずねえ」

どこか微かすかに誇張されたところのある快活さで桃子は陽気に多喜子の背中をたたいた。

「私は私よ。お互があれで幸福なんだから、はたでかれこれ云うに及ばないのよ」

私は私と桃子がいう、その気持の内容がはつきりせず、謂わばそんなに手際よく自分だけ複雑な生活の中で別者のように云つていられる心持が多喜子には納得ゆかないのであった。桃子のそういう態度は大変怜愍なようで、その実自分の心持を見守る手数をどこかで省いているか、投じているかのように感じられるのである。

音楽も拔群であるし、絵をかかせればやはり目をひくだけの才気を示し、人の心の動きを理解する力も平凡ではないのに、桃子にはとことんの処へ行くとすらっと流れてしまうものがあつた。一本気なところのなさ、桃子のいろいろの才能をも、つまりはちやんと実らせない原因のようであるし、多喜子はそのことをもやっぱり桃子の毎日の境遇ときりはなして見ることは出来ないと思うのであつた。

頭脳の明敏な愛嬌にほんのぽつちり面倒臭さを露わに示したうわてな親密さで、桃子は、

「さ、あなたはどっちへ帰るの？　きようはあなたの護衛の騎士になつてあげるわよ」

「ありがとう。でもきょうはいいわ、五時に日比谷で原に会うの」
「ハハア」桃子は抑揚をつけてそう云いながら大きく顎をひいて芝居がかりの合点をする、手にもっていたベレーを振って、シラノ・ド・ベルジュラックが舞台でやるような挨拶をした。

「じゃ私さつさと消えるわよ、さよなら」

ヴェランダの降口まで足早に去って、桃子はそこからもう一度こっちへ顔をふり向け、腹立ちより寥^{さび}しい気分で遠ざかってゆくその姿を見送っていた多喜子に向って、手をふった。

シモーヌ・シモンがディアンヌという裏町の娘に扮し、ジェームス・スチュアートが道路掃除夫のチーコになっている「第七天国」という映画も、バーバラ・スタンウィックの出演しているも

う一つのも、どっちも背景に欧州大戦時代をとりいれた作品であった。多喜子は並んでいる参吉に、

「何だか古くさいわね」と囁いた。

「うん」

場内が明るくなつて、間奏樂の響いているとき参吉は、
「変な工合に現代の空気を反映してるみたいな作品だな」
と云つた。

丁度燈火管制の晩であつた。二人は市電の或る終点で降りて、
一斉に街燈が消され、月光に家並を照らし出されている通りを家
まで歩いた。

ふだん街の面をぎらつかせているネオンライトや裝飾燈が無く、

中天から月の明りを受けて水の底に沈んだような街筋を行くと、思いもかけない家と家との庇合いから黒く物干が聳えて見えたり、いつもとは違う生活の印象的な風景である。とある坂の途中に近頃開拓された分譲地のところへ来ると、彼等は思わずどつちからともなくそこへ立ち止った。

「何て感じでしよう！」

截りたての石で直線に置まれた新しい石垣の層々の面に隈なく月が灌^{そそ}いでいて、柔かい土の平らな湿った黒さ、樹木の濃淡ある陰翳が、燦く石面の白さと調和して、最も鋭敏な
白^{ワイト}の版面の効果で現れている。
ブラック・アンド・ホ

多喜子は参吉の腕をじっと自分の胸にひきよせて、息をのむよ

うにこの冷たい、荒い、夜景の美しさに見とれた。

「思い出すわ、私。——ほら、私たちが一緒になつて間もなく、大塚の公園へ行つたとき、何かの工事で、やっぱり大きな石がちらかっているところを上から月が照していたことがあつたでしょう？」

多喜子は、こんな夜を参吉と歩いて行く心持を足から、眼から、円い輪廓を示し出している体じゅうから味わいつくそうとするようであつた。

「おい、大丈夫かい？ 月になんか憑かれたつて知らないよ」
「大丈夫よ、今度は自信があるんだから」

家の近くの横通りに曲ると、暫くだまって歩いていた参吉が、

腕によつてゐる多喜子の手を自分のもう一方の手で持ち添えて、もつと深くかけさせながら、静かに云つた。

「――なるたけ俺がよばれないうちに生んじやえよ、ね」

もつと路が狭くなつて、はずれた石の溝どぶづた蓋などがあるところへ来ると、参吉がそんなものを用意してゐると思つてもいなかつた懷中電燈を時々つけて、月光が樹の枝々で遮られてゐる多喜子の足元を照らしてやつた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第五卷」新日本出版社

1979（昭和54）年12月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

親本：「宮本百合子全集 第五卷」河出書房

1951（昭和26）年5月発行

初出：「新女苑」

1938（昭和13）年1月号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年4月22日作成

2003年9月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二人いるとき

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>